

2026年度に開講する平和科目一覧

開講場所	No.	開講科目名	担当教員名	授業概要等
東広島	1	平和と人間A-環境と生物の未来へ	古澤 修一	世界の人々が平和を求めながら直面している困難を学び、その克服のためのさまざまな努力を、特に環境、生物、エネルギー、資源、産業、バイオテクノロジー等の方面に焦点をあてて考察してゆく。
	2	平和と人間B-人間と文化の未来へ	池田 秀雄	地球上に生きる人間、多様な生命の共存、共生のために、有限の資源とエネルギーを有効活用し、バイオテクノロジーの将来を考える。そのような基礎的知見を踏まえ、人びとが平和的共存を目指してどのように活動してきたか、倫理意識を学び、文化交流の歴史を学び、芸術、スポーツ等の文化を学ぶ。
	3	飢餓・貧困・環境問題からみた平和学	川井 清司	世界人口が80億人を超えたとする現在、飢餓・貧困・環境問題に起因する紛争が頻発している。本科目では世界の飢餓状況や食糧生産の現状・問題点などを掘り下げ解説する。また、日本の若者がこれら問題について何を体験し、どう貢献してきたのかについて、国際協力機構(JICA)職員が体験談を紹介する。世界の不均衡についてはゲーム形式の講義も行う。
	4	国際関係論	永山 博之	国際関係の初等レベルの講義です。17世紀以後、国際関係の構造がどのように変わってきたかをふまえ、国際関係の多様な要素をバランスをとって議論します。特に近年の国際関係のアイテム、メディア、米中ロの政策、新しいタイプの戦争などの観点から、講義をすすめる予定です。さらに国家と国家による「国際関係」という枠組み自体が近年変化しつつあるといえるのか、あるいはアナキーという基本構造は変わっていないのかという問題にも注目します。
	5	戦争と平和に関する学際的考察	池端 路子	本授業は計6名の教員によるオムニバス形式で進められ、戦争と平和の歴史、第一次・第二次世界大戦、中東、朝鮮半島、日本、そして平和思想など、多様なテーマが取り上げられる。これらを通じて、植民地主義とは何か、その問題点は何かにについて理解し、全体として「平和」を希求するために必要な知識と主体的な思考力を養うことを目標とする。
	6	暴力の比較宗教学	杉木 恒彦	近年の宗教的テロリズムに見られるように、なぜ他者への慈しみや平和を説く宗教が、時に暴力と結びつくのか。本授業では、紛争にルールを導入しようとする国際人道法の議論等から始めて、世界の様々な宗教における暴力の事例(殺生や殉教や紛争等)を学びながら、現代社会の論点である(宗教と暴力)について、比較宗教学の観点から知識と理解を深めていく。これにより、宗教と暴力の関係をめぐる冷静な理解を得ることを目指す。全15回のうち、前半は講義により基礎的な知識と理解の習得を行い、後半は履修学生によるグループ・プレゼンテーションを通して同テーマに関する理解と考察を深めていく。
	7	核時代の科学と社会	中尾 麻伊香	この授業では、異なる時代や地域で、科学者、政府・軍関係者、作家、被爆者、ジャーナリスト、アクティビスト、アーティストなど、多様な人々がどのように核を捉えてきたかを学び、核時代の科学と社会についての幅広い知識を得るとともに、核を捉える自らの視座を培うことを目標とする。また、ゲスト講師を招いた授業も予定している。
	8	安全な社会環境の構築をめざして	三浦 弘之	第二次世界大戦後の戦後復興だけではなく、今日では、天災や人災を含め、わたしたちの社会環境の持続は大きな課題である。「平和」を生きてのびる場所のあることを考えとき、工学技術にはさまざまな取り組みが進んでいる。それら先端的な研究の成果や問題点をわかりやすく紹介しながら、社会環境としての「平和」への技術について、受講生自らが考えることができるようになることを目標とする
	9	放射線と自然科学	須田 祐介	分野:理工学、分科:物理学となっているが、物理学、天文学、生物科学、地球惑星科学などにわたる、学際的内容である。自然界に存在する放射線、人工的に生成される放射線について、その種類、性質、応用、人体への影響等について、科学的な知識を身につける。単に存在する、しないではなく、定量的な考え方が重要であることを強調する。複数の教員による放射線の科学的応用の解説を通じて放射線の多様な面を学ぶ。これらを通して科学的知識・技術の発展と平和のあり方について考察し、理解を深める。
	10	広島県の歴史と国際社会	小宮山 道夫	広島県の歴史および広島大学の学生として知っておきたい広島大学の歴史を学ぶとともに国際社会に果たす広島の役割について学ぶ。その学習を通し、多義的な「平和」の意味内容、そしてその在り方について自らの意見を述べる。
	11	ひろしま平和共生リーダー概論	山本 幹雄	広島大学では、「平和」の意味を「全ての人が共生できる社会」と捉え、そのような社会の実現に向けて身近な地域で課題解決に主体的に取り組むことのできる人材:「ひろしま平和共生リーダー」の育成を目指している。 本講義は、「ひろしま平和共生リーダー」を志向する学生を対象に、 ①被爆者の高齢化、被爆体験の風化が危惧される中で喫緊の課題となっている被爆体験の伝承と発信(平和共生領域) ②急速な過疎化・高齢化の進展により維持が困難になりつつある中山間地域、島しょ部における地域社会の再生(地域共生領域) ③身体的・精神的あるいは社会的ハンディキャップを抱える人々が共生することができる社会の実現(ソーシャル・インクルージョン領域) の3テーマを柱として、基本的な地域課題を理解するとともに、課題解決に向けた基礎的な考え方・方法論を学ぶ動機付けとすることを目的とする。
	12	世界の紛争と平和	山根 達郎	この授業では、平和学習の観点から、次の目標を目指します。 ☑現代に蔓延する越境的な地域紛争の特徴を理解します。 ☑紛争解決に向けた国際社会による取り組みを理解します。 ☑Active learningにより学生同士の学びを目指します。 目標達成のためのキーワード:紛争理解、自律、他者理解、社会貢献 (概要)20世紀は「戦争の世紀」とも呼ばれます。21世紀は「平和の世紀」として拓いていくことはできるのでしょうか。20世紀の終わりに冷戦が終結しても、今も世界のどこかで武力紛争が生じ、無辜の市民たちが死の恐怖にさらされている現状があります。こうした地域的な紛争は、単に紛争・国内部の問題に留まりません。武力紛争から生じる脅威は国境を超え、世界の平和と安定を揺るがしかねません。難民、テロリズム、武器の蔓延、雇い兵の移動などがその例です。この講義では、そうした現代に蔓延する越境的な地域紛争の構造と、紛争解決に向けた国際社会による取り組みについての理解を深めます。
	13	広島大学のめざす国際平和	小宮山 道夫	広島大学の学生として知っておきたい広島大学の歴史を楽しく学ぶとともに、国際社会に果たす広島の役割について考える機会を提供する。その学習を通し、多義的な「平和」の意味内容、そしてその在り方について認識する。また、受講生同士の交流を通じて自らの意見を深め、その意見を論理的に述べられるようになる。
	14	平和の人類学	楊 小平	本講義は、文化人類学の視点から「平和」というテーマを考えます。文化人類学ではエスノグラフィという調査手法を用い、フィールドワークによって様々な実践から社会を理解します。講義では、平和思想の諸相、平和のための記念館及びその展示、絵画や映画等などの芸術的な平和表象、平和へのツーリズム等、という平和に関わる表象と実践を具体的に学び、その上で、「平和」と身近な日常生活の関係性を考えます。
	15	文学と芸術から考える核時代	川口 隆行	この授業では、文学を中心に映画、美術、音楽などの芸術文化を通して、トリニティ実験と広島・長崎の原爆体験から始まる「核時代」の問題(日本と世界の核被害、戦争と植民地主義、原子力の平和利用etc.)について広く学ぶ。授業担当は、川口隆行(教育学部:日本近現代文学・文化史)、松永京子(文学部:アメリカ文学・北米先住民文学)、多田羅多起子(教育学部:日本美術史)が担当する。また、アーティストや博物館・美術館の学芸員をゲストに迎えたワークショップを開催する。

開講場所	No.	開講科目名	担当教員名	授業概要等
東広島	16	国際平和への記憶学	VAN DER DOES LULI	本授業では、「記憶」が過去の事象の記録に留まらず、常に変化し、個人や集団社会の現在の行動・態度や未来の意思決定に与える影響とその仕組みを、国際摩擦と相互依存、戦争・紛争と和解、大衆文化、メディアとAIなど、多様な分野の事例で考察する。記憶学の基礎的な知識と方法論を習得し、時事問題の報道に見られる「記憶」の攻防の機序を説明し、自分や周囲の「記憶」を分析して身近な課題の解決に援用する力を養う。
	17	ポストコロナルと平和	中村 平	殖民(地)主義(コロンializm)の反省から登場したポストコロナルなものが、多様なマイノリティへの抑圧克服の運動＝思想として波及してきた歴史を学びつつ、広島をめぐる平和と実践との節合を探究する。現在進行形の様々な論点を学び、討議し、思想的介入を通して、平和思想の不断の革新を運動し実践していく。
	18	沖縄と平和	川野 徳幸	沖縄をめぐる政治的・社会的問題とその構造を理解することで「平和」とは何かを考える。本科目の前半では、主に沖縄戦に関するテーマを扱い、沖縄での地上戦の状況、戦後復興、戦争体験の継承、基地問題との関連性をカバーする。後半では、戦後の基地問題の歴史的経緯と世界の米軍基地をめぐる問題について考察し、今日の沖縄が置かれている状況を理解するとともに、その解決策を思考する。
	19	Visualization of War	CANDELARIA JOHN LEE PAMPLONA	This course aims to develop students' analytical skills in examining the historical evolution and ethical dimensions of war visualization across different media formats, enabling them to deconstruct the techniques used to frame war narratives and understand how media can function as tools for either propagating conflict or advocating for peace.
	20	軍縮と平和・安全保障	戸崎 洋史	日本にとって重要な外交・安全保障政策の1つにも位置づけられてきた核軍縮をはじめとする軍縮は、どのように進展し、議論され、あるいはいかなる困難に直面してきたのか。「理想」と「現実」の両面から、また国際関係を規定する力、利益、価値(規範)といった観点から、軍縮と平和・安全保障を多角的に考える。
	21	広島の世界史と戦争・平和	横山 尊	本授業は、広島の世界史を古代から現代まで多角的に学ぶことで、地域史・軍事史・国際政治・文化表象の観点から広島を総合的に理解する力を養うことを目標とする。前近代の地域形成、近代における軍都化、移民の歴史を踏まえ、原爆投下の政治的背景や戦後の被爆者運動・反核運動、さらには映画や海外からのまなざしを通じて構築された「ヒロシマ」の記憶と表象を考察する。また、広島大学や西条地域の歴史も扱い、受講者自身の生活圏を歴史的文脈に位置づけて理解することで、広島の世界史と平和の課題を自らの視点で再構成できるようになることを目指す。
	22	映画が描く沖縄の記憶	藤城 孝輔	戦後80年という節目を迎え、戦争に関する歴史の叙述は、体験世代による直接的な証言の段階から、体験をもたない世代による記憶の継承・再解釈の段階へと移行しつつある。この転換点において特に重要なのは、過去の出来事がいかに意味づけられ、現代の文脈に接続されているかという視点である。歴史叙述における意味づけや再解釈に対して無自覚であると、歴史の選択的忘却や政治的利用を見ることが難しくなる。本講義では、国や時代を超えさまざまな映画で描かれてきた沖縄戦および戦後の米軍占領に焦点をあて、沖縄の記憶がどのように意味づけられてきたかを概観する。異なる社会や時代ごとの記憶の変容を検討することで、映像メディアが記憶を同時代の文脈のなかで意味づけなおし、再構築する役割をになってきたことをあらかにしたい。
霞	23	平和とウェルビーイング(Peace and Wellbeing)	川合 紀宗	平和を構想する上で重要な概念であるウェルビーイングの基礎を理解するとともに、自分自身の心身・他者・社会が個人と集団のウェルビーイングをどのように形作るのかについて分析し、インクルーシブな社会を実現するために自らが果たす役割について考える。そのために講義・平和に関する動画の視聴・平和に関するモニタリングなど多様な形で学びを深める。
	24	Atomic Bomb Survivors (Hibakusha) and World Peace	VASILEVA VLADISAYA BILYANOVA	The primary objective of this course is to provide students with multiple perspectives for critically engaging with the existence of nuclear weapons and the meaning of the atomic bombings. To achieve this, the course examines different historical and contemporary framings, narratives, and concepts surrounding the atomic bombings, their consequences, and nuclear weapons. Particular attention is given to hibakusha's perspectives and their efforts to transform their experiences into foundations for peace advocacy, challenging state and status quo narratives.
	25	ヒロシマ発平和学	川野 徳幸	被爆地広島に根ざす広島大学は、その理念のはじめに「平和を希求する精神」を掲げています。何故、広島大学は「平和」を重要視し、その具現化に努力してきたのでしょうか。それを知るには「ヒロシマ」の置かれた歴史的役割、そしてその意味を知る必要があります。本授業においては、原爆被害、その他の核被害、環境問題、そしてフクシマを通じ、「ヒロシマ」そして「平和」の意味を考えたい。
	26	医学からみた戦争と平和	田代 聡	戦争で用いられる無差別大量殺戮兵器である核兵器や生物・化学兵器、即ちNBC兵器は、非戦闘員にも多数の死傷者を生じ、同時に長期に亘る健康被害をもたらす。また、現代ではこのような兵器の使用は戦争に限られるのみならず、形を変えて小規模化することで我々の日常生活の中でもテロ行為として使用される可能性が現実のものとなっている。本講義では、広島原子爆弾による人的被害を中心に無差別大量殺戮兵器がもたらす健康被害の全体像を最先端の科学的根拠に基づいて概説すると共に、これらの兵器使用の非人道性を医学的立場から明らかにする。本授業での知見を通して、原爆被害者が求める平和の意義について考察を深める。
	27	平和と人間Cー広島で学ぶ(原爆とは何だったか)ー	圓山 裕	広島原爆被害を直視すると共に、原爆投下に至る歴史を通して、平和を希求するための内省を深める。原爆が社会に与えた衝撃と影響について、3つのキーワード「放射線被曝、世界史のなかのヒロシマ、広島復興と継承」に基づいて考察する。平和な社会を壊す戦争と核兵器の脅威について、科学と技術、医学と医療、歴史と異文化など多様な視点から文理総合的に考察し、ヒロシマを次世代に継承することの意義を考える。
	28	霞キャンパスからの平和発信	久保 達彦	広島大学の建学の精神である「自由で平和な一つの大学」を支える5大理念のうち、その最初に掲げられた「平和を希求する精神」は、広島が人類初の原子爆弾の惨禍により、多数の被災者、後障害者を出したこと由来することは言うまでもない。広島大学でも、その前身となる諸学校において多数の教職員、学生の被害者を出し、戦後、多くの広島大学関係者が、継続的に原子爆弾被害者や化学兵器(毒ガス)製造者後障害者の診療、基礎・臨床研究、さらに国際貢献を行ってきた。特に、医療従事者・生命科学系研究者になることを目的として広島大学に入学した受講者は、先人たちの努力の軌跡を知るとともに、平和社会の実現のために必要なことは何かを生徒考え続けなければならない。本講義では、主に霞キャンパスで教育・研究・診療活動を行っている教員等により、戦争、放射線災害、貧困、飢餓、国際支援、環境破壊、差別などの平和に関わる諸問題について講義が企画・実施されるが、受講者が講義を受け身で聞かだけでなく、能動的かつ継続的に平和な世界の実現のために論理的考察・行動ができる端緒となるような授業を目指す。
	29	平和と人間Dー広島から未来に向けてー	寺本 康俊	広島原爆被害を直視すると共に、原爆投下に至る歴史を通して、平和を希求するための内省を深める。原爆が社会に与えた衝撃と影響について、3つのキーワード「放射線被曝、世界史のなかのヒロシマ、広島復興と継承」に基づいて考察する。平和な社会を壊す戦争と核兵器の脅威について、科学と技術、医学と医療、歴史と異文化など多様な視点から文理総合的に考察し、ヒロシマを次世代に継承することの意義を考える。